

地域で学び、 地域で育つ。



東京家政学院大学 地域連携事例集 2013

地域で学び、地域で育つ。

東京家政学院大学 地域連携事例集 2013

東京家政学院大学では、地域貢献を教育、研究に続く第三の使命と捉え、地域連携活動を積極的に推進しています。これまでに衣、食、住、デザイン、児童、福祉など、生活学に関わるさまざまな分野で地域の方たちの協力を得て連携活動を進めてきました。

ところで、本学の地域連携の特徴のひとつは、学生が主役となって進めていくということです。授業を通じた連携はもちろん、連携研究においても教員の指導のもと、学生が主体的に関わります。このことは、本学が地域連携を単に地域貢献の機会と考えているのではなく、教育研究活動を充実させるための機会ととらえていることを示しています。

大学の教育研究活動が充実し、学生の力量や研究レベルが向上すれば、自ずと地域貢献できる可能性は高まります。本学では地域連携活動は、大学から地域への一方通行ではなく、教育研究の充実が地域貢献に繋がり、また、地域貢献が教育研究の充実に繋がるという好循環を生み出す仕組みと考えています。そのため、地域連携活動と教育研究活動は密接に結びついており、自ずと学生が主役になります。

このような本学の地域連携活動の特徴を踏まえ、本事例集では、活動に参加した学生がどのような取り組みをし、何を学び、どのように成長を遂げたのかを中心にご紹介いたします。

それぞれのプロジェクトを見ると、学生の成長が、結果として地域貢献に結びついていることがわかります。学生の成長と地域貢献という一見無関係に思える両者が、実は密接に繋がっているのです。

本事例集により、地域の皆さまには、本学の地域連携の特徴をご理解いただき、今後ともお力をいただきたく願っています。また、学生の皆さんにおいては、地域連携活動に積極的に参加し、それぞれに大きな成長の機会を得ることを願います。

平成25年3月
東京家政学院大学
地域連携・研究(町田)センター

Section 1

地域連携プロジェクトレポート

※ 本レポートに記載されている学生の学年は、
いずれも平成25年3月現在のものです。

地域で学び、 地域で育つ。

Contents

1. 地域連携プロジェクトレポート	4
(1) 葉山ショウガを用いた 商品開発プロジェクト	5
(2) 津久井地域「にごみ」 再現・普及プロジェクト	9
(3) 商業施設との連携による ファッションショー	13
(4) 子育てお母さんサポート プロジェクト	17
(5) デイサービスプログラム 開発プロジェクト	19
2. プロジェクト・サマリー ～さまざまな地域連携事例～	21
3. 地域交流会2012レポート	25
4. 地域連携活動の記録	27



幻のショウガに、 調理学の知恵が命を吹き込む。

『幻の葉山ショウガ』の復活を目指した、
研究ベースの地域連携プロジェクト

葉山ショウガは高値で取り引きされていた？

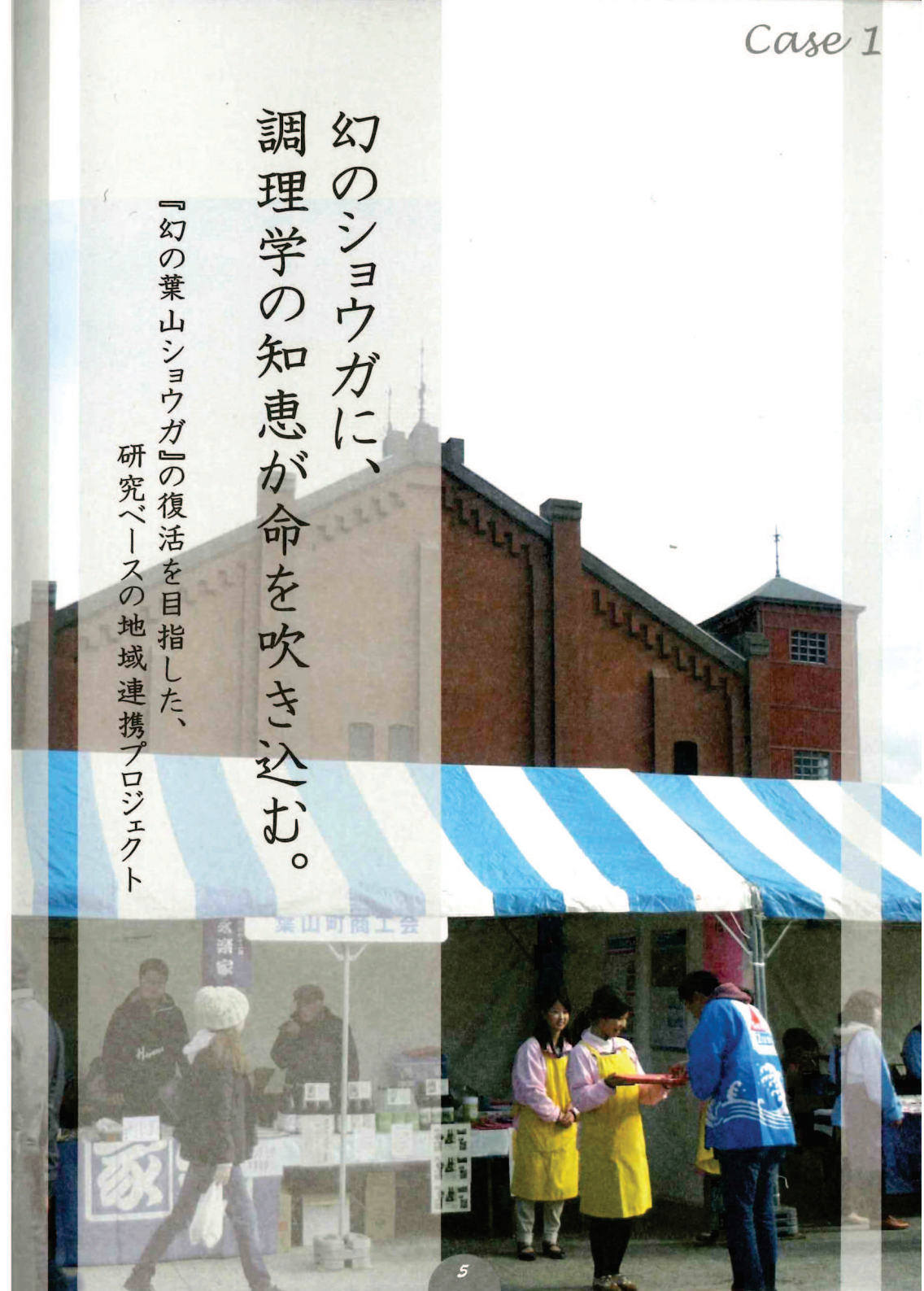
神奈川県三浦半島の付け根に位置する葉山町は、御用邸やヨットハーバーを擁し、海と山に囲まれた閑静な小さな町だ。観光地のイメージが強い葉山町だが、その昔は農業も盛んで、中でもショウガは、昭和三〇年代まで同町の主要な栽培作物のひとつであった。特に長柄地区と上山口地区で栽培されたショウガは品質に優れ、市場でも高値で取り引きされていたという。しかし、今では栽培農家が減少し、すっかり幻となってしまった。

そこで、葉山町商工会ではショウガを用いた商品開発を推進することとした。ショウガ利用商品が普及することにより、葉山町がショウガの産地であったことが思い出され、かつてのようにショウガの栽培が盛んになり、再び同町の特産品として広まっていくことが期待された。こうした背景から、葉山町商工会と本学調理学研究室の連携による、葉山ショウガを用いた商品開発プロジェクトが平成二四年四月よりスタートした。



プロジェクト概要

- テーマ
葉山町の商店等での販売を目指して、葉山産のショウガを用いた商品開発を行う。
- パートナー
葉山町商工会(会長 柳 新一郎)
- 担当教員
小口悦子 教授
(現代生活学部生活デザイン学科)
- 担当学生
遠藤良恵、西橋綾香
(家政学部現代家政学科4年)
- 実施期間
平成24年4月～平成25年3月



現地を視察し、大学ではさまざまなショウガ利用商品を試作

本プロジェクトは、調理学研究室（小口悦子教授）に所属する遠藤良恵さんと西橋綾香さんが担当した。二人は、それまで、葉山町がどこにあるかも知らず、ショウガにも特段の関心はなかったという。そこで、まずは、葉山町を知ることからスタートした。五月に葉山町を訪問し、町の様子を見つ、ショウガ畑を視察した。

一方、大学においては、既存のショウガ利用商品に関する調査と並行し、収穫され始めた葉山産のショウガを用いて、さまざまな商品の試作を試みた。クッキー、羊羹、スイートポテト、おはぎ、かりんとう、ジンジャー克蘭チ、佃煮、わらびもち、パウンドケーキ、ジンジャーエール、チョコレート、ジンジャーソルトなど、自分たちが作りたいと思ったものを中心に七〇種以上を試作した。試作と改良を繰り返しながら、精度を高め、候補となる商品を絞り込んでいった。

今後の展望、そして、プロジェクトから学んだこと

今回提案したいくつかの試作品のうち、ショウガの佃煮は高評価を得、商品化の検討が進められている。ジンジャーエールやアイスクリームも商品化の候補であり、いずれ、葉山町のお土産品として店頭に並ぶことが期待される。

プロジェクトが終了するとともに学生たちは卒業する。このプロジェクトに参加したことについて遠藤さんは、「商品開発は難しかったが、自分が作ったものを認めてもらえたことは自信になった。苦労の先に喜びがあることがわかった」と言う。西橋さんは、「思った以上にたいへんで、プレッシャーもあったが、大学生活の中でもっとも充実していた一年だった」と振り返る。さらに、地域連携研究は、たいへんなことが多いが、その分得ることも多いので、後輩たちにもぜひチャレンジして欲しいと言う。

プロジェクトで学んだことを糧に、四月からは実社会での新しいチャレンジがスタートする。

KVA Column

継続する地域連携プロジェクト

本プロジェクトは平成24年度にスタートしているが、葉山町商工会と本学との連携は、2年目となる。平成23年度は、葉山町の特産品である夏ミカンを利用した商品開発をテーマにプロジェクトを実施した。連携の成果に基づき、夏ミカン最中や夏ミカン羊羹などが既に同町内で販売されている。

地域連携プロジェクトは地域とのつながりの中で実施するものであり、地域の営みが継続していく以上、連携プロジェクトも1年限りではなく、一定期間継続することが望ましい。そのためには、パートナーとの良好な関係が必須となる。その点において、葉山町商工会とは、お互いの立場を認めあった上で、明確な役割分担に基づきプロジェクトを進めている。そのことが学生たちのモチベーションに、ひいては、成果に結びついている。良きパートナーに巡り合えることは、連携プロジェクト成功の秘訣のひとつである。葉山町商工会とは平成25年度も連携を継続すべく調整を進めている。



地域のイベントに参加し、試食&アンケート調査を実施

プロジェクトでは、地域のイベントに参加し、開発商品の試食とアンケート調査を実施した。イベントに参加することにより関係者以外の第三者の率直な意見を聞くことができる。最初のころは緊張もあり、自分たちの開発した商品を勧めることにためらいがあったが、見ず知らずのお客さまから直接に「美味しい！」と声をかけてもらうことにより、自分たちの技術に確信を持つことができた。お客さまの声は、ポジティブなものもネガティブなものも励みになったという。また、お客さまや出店者など葉山町の人たちとの交流もあり、これまでに葉山町と葉山ショウガに対する愛着が深まっていた。

九月には「葉山ふれあいマーケット」に、十月には「ビッグハヤママーケット」に参加し、十一月には、横浜赤レンガ倉庫で開催された「かながわ商工会まつり」にも参加し、横浜でも葉山ショウガをアピールした。

津久井地域の伝統的家庭料理、「にごみ」とは？

神奈川県相模原市津久井地域は古くから小麦の栽培が盛んだったため、日常的にうどんが食されてきた。昭和三〇年代頃までは、うどんと野菜を一緒に煮込んだ「にごみ」は一般的な家庭料理だったが、食生活の変化により今ではほとんど食へられることがなくなり、作り方を知る人も少なくなっている。

津久井地域商工会連絡協議会では、この「にごみ」を津久井地域の名産品に育てたいと考え、本学との連携による「にごみ」の再現と普及を目指すプロジェクトがスタートした。本学では生活デザイン学科の櫻井美代子助教を中心とした学生有志によるチームを編成した。リーダーの前田美佳さんと村上絵美さんは、津久井地域のことはよく知らなかったがレシビを再現できることや、学外の人と交流しながら調理ができるのはおもしろそうだと感じ参加した。

プロジェクトでは、まず、かつて「にごみ」を作ったことがあるおばあちゃんたちに聞き取り調査を行った。



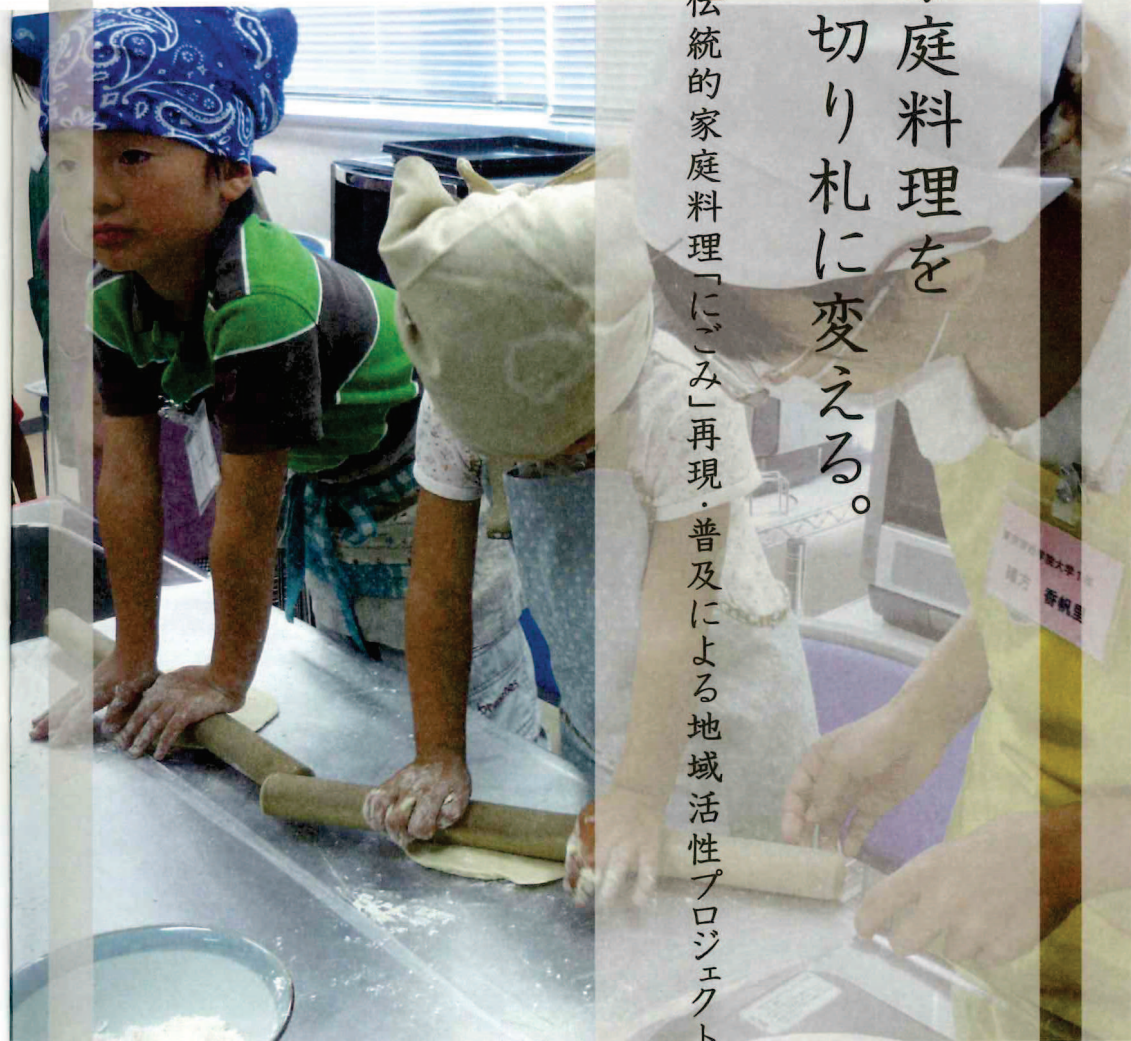
プロジェクト概要

- テーマ
津久井地域の伝統的家庭料理「にごみ」を聞き取り調査に基づき再現するとともに「にごみ」の普及を行う。
- パートナー
津久井地域商工会連絡協議会
- 担当教員
櫻井美代子 助教
(現代生活学部生活デザイン学科)
- 担当学生
前田美佳、村上絵美(生活デザイン学科3年)、ほか11名
- 実施期間
平成23年4月～平成25年3月



消えゆく家庭料理を 地域活性の切り札に変える。

津久井地域の伝統的家庭料理「にごみ」再現・普及による地域活性プロジェクト



初めてなのに懐かしい。
おばあちゃんの味が現代に蘇る

津久井地域の四地区（城山、津久井、相模湖、藤野）で聞き取り調査を行い、味付けや食べ方の違い等を確認した。調査の結果、城山地区は味噌と醤油、藤野地区は味噌など、地域によって味付けが異なることが明らかとなり、再現レシピも味噌味と醤油味の二種類を作成することとした。

聞き取り調査に基づく再現は、おばあちゃんたちの記憶に基づくものゆえ、話しのとおりに調理しても昔と同じ味が再現できるとは限らない。使用する野菜の種類や量、うどんの塩分量などに合わせて修正を加え、工夫をしながら再現レシピを完成させた。再現した「にこみ」は見た目も味も決して華やかではないが、家庭料理らしいやさしい味で、初めて食べるのになぜか懐かしさを感じる、そんな料理だった。

平成二三年度は再現レシピのパンフレットを作成し、飲食店をはじめ、関係各所に配布し、「にこみ」の普及を図った。

今後の展望、そして、プロジェクトから学んだこと

これまでの活動により、「にこみ」は新聞や書籍等にも紹介されるようになった。しかし、広く飲食店のメニューに採用されているわけではなく、未だ「津久井の名物」になったとは言えない。前田さんも「にこみ」という伝統料理が津久井地域にあると誰もが知っているようになつて欲しい」と考えている。そのためにはまだやる必要がある。プロジェクトでは伝統を踏まえた新しい「にこみ」の開発を進めている。伝統と若い知恵の融合が新たな魅力を付与する可能性もある。

プロジェクトに参加した二人は、地域の方とコミュニケーションできたこと、伝統料理の力強さを実感できたこと、苦労の先にある喜びを感じられたことなど多くの学びを得ている。地域との繋がりが学生の学びや成長に結びついている料理教室の参加者の多くが「今後も参加したい」と答えている。地域の人たちの期待にも支えられ、今後も「にこみ」普及を目指した活動を進めていく。



KVA Column

プロジェクトが地域と学生をつなぐ

本学の所在地は東京都町田市であり、本プロジェクトの舞台は神奈川県相模原市である。本プロジェクトは都県をまたいだ連携ということになる。しかし、地図上は津久井地域と町田市は隣接しており、本学にとって津久井地域は地元と言えるエリアだ。津久井地域は緑豊かな首都圏のオアシスのような地域だが、交通手段が限られていることもあり、本学の学生にとってはけして馴染みのある地域ではない。本プロジェクトに参加した学生の多くもプロジェクトに参加するまでは、津久井地域のことはよく知らなかったという。しかし、ひとたび知れば、風光明媚というだけでなく、人のあたたかさや、地域文化の魅力も含め、関心を持つようになる。

津久井地域には、農業や林業、観光、伝統工芸など、生活学分野と親和性の高い産業が多く見られる。連携プロジェクトをきっかけに相互理解が進み、やがて、学生と地域の自然な繋がりが育っていく。こうしたことも地域連携プロジェクトの意義のひとつと言える。



認知度拡大を目指して料理教室を実施

アンケートの結果、「にこみ」の認知度は極めて低いことがわかった。そこで、平成二四年度は、「にこみ」を知っていたかどうか機会として、料理教室を開催した。

調理のプロではない学生たちが料理教室を行うには相当の準備が必要となる。試行錯誤を重ね、大学の調理実習室で予行演習も行ってプログラムを完成させ、九月に藤野地区、一〇月に相模湖地区で料理教室を実施した。料理教室の難しさについて前田さんは、「グループによって作業のスピードが違う。全体を見渡して時間配分することが難しい」と言う。村上さんは、「参加者と話しながら教えていると重要なポイントを飛ばしてしまうこともあった」と振り返る。

学生にはさまざまな困難があったが、参加者の料理教室への評価は高く、アンケートでは、ほぼ全員が「満足」と回答した。「来た人が喜んでくれたことが嬉しくて、それまでの苦労は消えてしまった」と前田さんは言う。

大型商業施設と大学が連携し、地域貢献を目指す

アリオ橋本は、平成二二年に神奈川県相模原市の橋本駅前にオープンした大型の複合商業施設である。橋本駅は本学最寄の相模原駅の隣で、JR横浜線・相模線と京王線が交差するターミナル駅である。多くの店舗が並ぶ商業地域で本学の学生も多く利用している。

アリオ橋本はコンセプトの一つに、『地域と共に成長し、協力しながら「町づくり」に貢献すること』を掲げている。一方、本学は地域貢献を大学の重要な使命のひとつとしている。近隣に位置し、地域貢献を目指す姿勢も合致することから両者は平成二三年に「地域貢献に関する協定」を締結した。アリオ橋本の客層や施設・設備、本学の学びの領域等互いの特徴を踏まえて意見交換を重ね、アリオ橋本のイベントスペースにおいて、夏に親子向けのものづくり・体験教室を、冬にファッションショーを行うことが決まった。本稿では、このうち、ファッションショーの実施について紹介する。



プロジェクト概要

- テーマ
アリオ橋本のアパレルショップから学生が商品を選び、各世代に向けたスタイルをいくつかのシーンを設定してコーディネートするファッションショーを実施する。
- パートナー
アリオ橋本(支配人 長尾 信博)
- 担当教員
白井 篤 教授、花田朋美 助教
(現代生活学部生活デザイン学科)
- 担当学生
岡野友美、小林紀子(生活デザイン学科3年)、ほか29名(平成24年度)
- 実施期間
平成23年6月～平成24年12月

「リアルな暮らし」に溶け込む 新しいファッションスタイルを提案する。

商業施設、学生、地域住民の三者連携による

「提案参加型」のファッションショープロジェクト





KVA Column

互いの特色を活かした多面的連携

本稿でも触れているとおり、アリオ橋本においてはファッションショーのほか、親子向けの「ものづくり・体験教室」を平成23年と24年の夏に実施している。これは、町田キャンパスの3学科(生活デザイン学科、児童学科、人間福祉学科)の教員と学生が、子どもたちと一緒に工作や裁縫、実験、車いす体験などを楽しむ企画である。毎年400人以上の子どもたちが参加し、好評を得ている。このほか、平成24年度はアリオ橋本にてインターンシップを実施した。4名の学生が2週間にわたり、華やかな商業施設全般の仕事を体験した。さらに、今後は、施設デザインをテーマとした連携も検討している。

それぞれの特徴を踏まえ、「あんなことはできないか、こんなことはできないか」と、お互いに知恵を絞り、多面的な連携を進めることで、双方にとって、また、地域にとって価値のある成果を生み出していくことを目指している。

平成二四年度は、シーンの数を増やすなど、バージョンアップしたショーを目指した。ただし、一年生が新メンバーとして参加したためチームづくりから始めなければならなかった。当初は「一年生は自分たちとは熱意が違う」(岡野さん)と感じていたが、コミュニケーションをとったり、仕事をしている姿を見せたりと接し方を工夫をしたところ、本番の二週間前には「一年生が自分から積極的に行動するようになり、チームがまとまってきた」(小林さん)と言う。こうしてチームがひとつになり、二回目の「KVAコレクション」も成功を収めた。

二年間の活動を経て二人は、「ゼロから何かを創るのはたいへんだけど、達成感がある。働くことの楽しさが少しわかった」(岡野さん)、「地域の人や後輩、先生たちと交流したことにより視野が広がった」(小林さん)と振り返る。プロジェクトを成功させた喜びだけでなく、仕事観の変化や視野の拡大などの成長がもたらされている。

学生主体の自主プロジェクトとしてチームを結成

プロジェクトは、生活デザイン学科の有志学生によるチームで実施することとし、花田朋美助教より関心のありそうな学生に個別に声を掛けつつ、授業を通じて広く参加を呼びかけた。

平成二三年度は呼びかけに応じた学生十五名で活動をスタートした。リーダーの岡野友美さんは、「今までにない形のショーで、自分たちでゼロから創りあげられるのはおもしろそう」と考え参加した。同じくサブリーターの小林紀子さんも「新しい取り組みに挑戦してみたい」との思いで参加した。

六月以降、毎週ミーティングを行い、役割分担やスケジュールの確認、コンセプトづくり等を進めた。イベントの名称は「KVAコレクション」女子大生が選ぶ「ファミリーファッション」と決まり、九月以降はアリオ橋本の担当者も交えて打ち合わせを行った。

こうして、学生主体のプロジェクトチームにより、ショーの企画が進められた。



企画・立案、チーム運営、対外調整、ステージ運営…

学生主体ということは企画立案、チーム運営、パンフレット制作など、あらゆることを学生が行うことである。アリオ橋本やイベント会社との折衝や調整では自分たちの思いどおりにいかないこともあるし、グループ内での意見の食い違いなども取り纏めていかなければならない。そうした困難に対し岡野さんは、「いいものを創りたい。とにかくやるしかない」という気持ちで向かったという。

シーンや衣装、演出、モデルなどすべてが決定し、前日には荷物の搬入を終え、いよいよ当日を迎えることとなった。当日はモデルとして協力いただいた方への対応、お客様への対応、アリオ橋本との調整、さらには撮影など、それぞれに役割が求められた。

こうして、平成二三年一二月三日、最初の「KVAコレクション」女子大生が選ぶ「ファミリーファッション」が開催された。当日は多くのお客様を得て、盛況のうちに終えることができた。

神奈川県伊勢原市で子育て支援を行う市民活動団体、フェリーチェBambi-ニは、平成二三年に発足した。自分たちが子育てをする中で、子育てに必要な地域情報が不足していると感じた経験から、ほかのお母さんたちも同じように感じているはずと考え、子育て支援のための地域情報誌の発行を始めた。平成二三年一月に創刊したフリーマガジン「フェリーチェBambi-ニ」は、料理や遊び、地域情報など子育てに役立つさまざまな情報を掲載し、伊勢原市を中心に五千部が配布されている。

本プロジェクトは児童学科のサークル「べぐみ」がフェリーチェBambi-ニと連携し、冊子のコンテンツを作成している。担当者より活動の趣旨や冊子の目的等を聞き、見開き二ページを使って子どもの遊びをテーマにした記事を八月と十二月に作成した。さらに、十一月には伊勢原市内で開催された親子向けのいも掘りイベントに参加し、地域のお母さんや子どもたちと交流した。



プロジェクト概要

- テーマ
子育て支援フリーマガジンに子どもの遊びをテーマに連載原稿を作成する。
- パートナー
フェリーチェBambi-ニ(代表 小林孝子)
- 担当教員
田尻さやか 助教(現代生活学部児童学科)
- 担当学生
荒井佑子、竹田百合香、市川千晴、望月愛里、利根川絵美(児童学科3年)
- 実施期間
平成24年7月～平成25年3月

原稿作成は、「どのように書いたら読者に伝わるか、どんなことを書いたら読者が楽しめるかを毎回考えるのが大変だった」(荒井佑子さん)一方で、「皆で意見を出し合いどうしたらより良い内容になるか、子どもたちがより楽しめるか話し合いながらの作業はとても楽しかったし、勉強にもなった」(望月愛里さん)と充実した時間でもあった。また、子育て中のお母さんに関われたことは「将来保育に関わる仕事に就いた時に活かすことのできる経験になった」(望月さん)と将来の仕事とも結びついている。

現在の学びを活かし、将来の仕事に結び付く経験

子育てお母さん×大学生 意外な繋がりが拓く新たな可能性

児童学の学びを活かした子育て支援プロジェクト



東京都多摩ニュータウン愛宕団地に平成二四年三月にオープンしたリハビリデイサービス「笑う門」は、団地一階の商店街の空き店舗を利用したリハビリ特化型の小規模デイサービスだ。「笑う門」では、リハビリ以外の時間は主にレクリエーションを行っているが、この時間も含めて利用者に満足に過ごしてもらいたいと考えている。また、地域とも繋がりを持つていきたいと考えている。

そこで、「笑う門」と本学人間福祉学科、多摩大学経営情報学部の三者が連携し、デイサービスのプログラム開発を目指したプロジェクトをスタートした。多摩大学は「笑う門」の近隣に所在し、経営学が専門であることから、本学の福祉の知識と多摩大学の経営の知識を合わせることにより効果的なプログラムを提供できるとの期待から連携した。学生たちはまず、「笑う門」で実習を行い、プログラムや利用者の状況等について情報収集を行った。



プロジェクト概要

- テーマ
デイサービスの新しいプログラムを提案、実施する。
- パートナー
リハビリデイサービス「笑う門」
多摩大学 経営情報学部
- 担当教員
西口 守 教授
(現代生活学部人間福祉学科)
- 担当学生
飯野 藍子、栗原 千穂、越川 紗姫
(人間福祉学科4年)
- 実施期間
平成24年8月～平成25年3月

実習を経た後、プログラム案を作成し、具体的なプログラムに落とし込むべく検討と調整が続いている。

学生たちは、「福祉施設と地域の繋がりに目が向くようになった」「飯野 藍子さん」と視野の広がりを実感しているほか、「福祉施設に異なる学部の学生が入ってくることに意味がある」「越川 紗姫さん」と大学間連携の可能性も感じている。さらに、「こういうデイサービスのあり方もあるのか」「栗原 千穂さん」と進路を考える契機になったという。

本連携は、今後も継続し、プログラムを実施することを目指す。

二つの大学とリハビリデイサービスの連携の始まり

情報収集を経て、プログラム開発、実施に至るまで

福祉と経営、二つの視点で デイサービスの新たな可能性を探る

大学間連携によるリハビリ特化型デイサービスとの連携プロジェクト



本項では、「Section 1 地域連携プロジェクトレポート」で紹介した以外のさまざまな地域連携プロジェクトをご紹介します。紙面の都合により各事例の詳細に触れることはできませんが、いずれの事例においても学生は学内ではできない実践的な学びの機会を得ており、そして、その成果のいくつかは、商品化の検討が進められるなど具体的な貢献にも結びつきつつあります。

1

実習授業を通じた食品開発プロジェクト



生活デザイン学科の3年生を対象とした授業「食企画・開発実習A」では、食品メーカーの協力により、商品開発を行います。平成24年度は、五十嵐酒造株式会社と岡田食品加工有限会社の協力により、それぞれ、桃色酒粕と葛粉を用いた商品開発に取り組み、酒粕を使ったチーズカナッペや葛粉を使った新食感のデザートなどユニークな商品を提案しました。これらの開発商品のうち桃色酒粕を使った魚練製品「さけまるくん」は、五十嵐酒造で開催された「第5回酒蔵コンサート」に提供され、来場者から好評をいただきました。

- ◆担当教員：山崎 薫 講師、奈良一寛 講師、
岩見哲夫 教授
- ◆連携パートナー：五十嵐酒造株式会社、
岡田食品加工有限会社
- ◆実施時期：平成24年4月～10月

Section 2

プロジェクト・サマリー ～さまざまな地域連携事例

相模原の地場野菜を用いたレシピ開発

「さがみグリーン」は、たか菜とからし菜を交配させて開発した品種で、相模原市でしか栽培されていない野菜です。生活デザイン学科の授業「調理と素材」ではJA相模原市との連携により「さがみグリーン」の普及を目指して、学生たちが「さがみグリーン」を用いたオリジナルレシピの開発に取り組みました。ふりかけ、ミルフィーユ風とんかつ、もちり胡麻豆腐、熱まんじゅうなど27品のレシピが提案されました。授業終了後には、学生の提案したレシピに基づき、JA相模原市女性会会員を対象とした料理教室を開催しました。

- ◆担当教員：小口悦子 教授
- ◆連携パートナー：JA相模原市
- ◆実施時期：平成24年4月～11月



2

アパレル企業と共同で学校用体操着を提案

学校用体操着は学校という限られた市場で販売されるため、保守的で画一的なものが多く機能的にもデザイン的にもまだまだ改良の余地があると考えられます。生活デザイン学科の授業「衣生活計画論」では、八王子のアパレルメーカー、株式会社レイバンの協力を得て、学生のアイデアを取り入れた新規な学校用体操着の開発に取り組みました。学生の提案は、いずれも従来の体操着にはない斬新さがあり、同社にて試作が行われました。今後、商品化に向けた検討が進められます。また、連携の成果は、12月に開催された「第4回大学コンソーシアム八王子学生発表会」において発表されました。

- ◆担当教員：富田弘美 講師
- ◆連携パートナー：株式会社レイバン
- ◆実施時期：平成24年4月～12月



有機野菜を用いた加工品開発プロジェクト

相模原市相模湖地区で有機野菜の栽培と販売を手掛ける合同会社さがみこ有機畑は、農林水産省の農業の6次産業化の認定を受け、ルッコラソースをはじめオリジナルの加工品を都内で開催されているマルシェなどで販売しています。食品加工研究室では、同社と連携し有機野菜を用いた加工品開発に取り組みました。農地や加工場を視察し、生産者から野菜栽培のこだわりなどを聞き、マルシェでの販売実習を行ったうえで、キュウリや枝豆など季節ごとに採れるさまざまな野菜を用いて試作を行いました。このうち、枝豆ソースは、秋に開催したマルシェにおいてテスト販売を実施しました。

- ◆担当教員：奈良一寛 講師
- ◆連携パートナー：合同会社さがみこ有機畑
- ◆実施時期：平成24年4月～平成25年3月



プリン容器のデザイン提案プロジェクト

八王子市の洋菓子店Sweets Factoryでは、地元の素材を使ったこだわりのプリンを製造販売しています。生活デザイン学科の学生が、このプリンの容器デザインに取り組みました。同学科の「生活デザイン演習」を履修した学生がプリンの味や原料、Sweets Factoryの店舗イメージ等に基づき、19種類の容器を提案しました。印刷や包装にかかるコストや手間等から直ちに商品の容器に採用するには難しいものもありますが、従来のプリンのイメージを翻すような斬新なものもあり、また、商品や店舗のイメージと合致するものもあり、今後、同店にて商品への採用可能性を検討します。

- ◆担当教員：白井 篤 教授
- ◆連携パートナー：Sweets Factory
- ◆実施時期：平成24年11月～平成25年1月

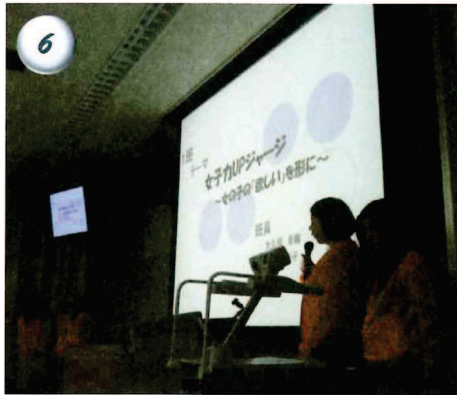


地元スーパーとの連携によるお弁当開発

生活デザイン学科では地元八王子のスーパー、株式会社スーパーアルプスの協力を得て「食企画・開発実習B」の授業を通じて、お弁当開発に取り組みました。同社担当者より、スーパーにおけるお弁当開発や販売、調理加工等についてレクチャーを受け、検討を進めました。いざいなど外観や素材、ターゲット等を考慮し、ユニークなお弁当5種類を提案しました。今後、容器や店舗バックヤードにおける調理方法等を検討したうえで、実際の商品としての販売を目指して検討を進めていきます。

- ◆担当教員：山崎 薫 講師、奈良一寛 講師、岩見哲夫 教授
- ◆連携パートナー：株式会社スーパーアルプス
- ◆実施時期：平成24年10月～平成25年3月





交流会 & 連携事例パネル展示の後、①学校
用体操着に関する調査研究、②デイサービスの
新規プログラム提案プロジェクト、③子育て
お母さんサポートマガジンとの連携プロジェクトの
3題の口頭発表を行いました。それぞれ連携
パートナーよりメッセージをいただきました。



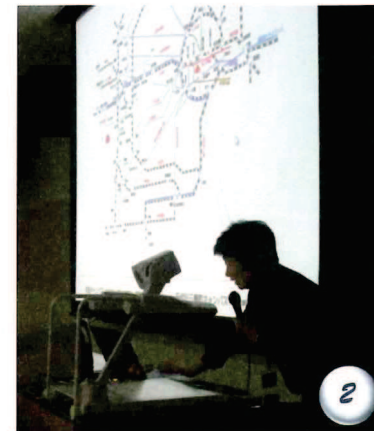
前半の口頭発表終了後、会場をローズコート
に移して交流会 & 連携事例パネル展示を行い
ました。本学卒業生の西武信用金庫職員の
進行により、12の事例発表を行うとともに、今後
の連携可能性等について参加企業と教職員、
学生が情報交換を行いました。

東京家政学院大学 地域交流会2012 レポート

本学では、地域の方との交流と本学の地域連携活動に関する情報発信の機会
として、平成19年度より、年に1回、地域交流会を開催しています。平成24年度は、
11月29日(木)に町田キャンパスにて開催しました。交流会では学生が主体的に参
加するという本学の地域連携活動の特徴を全面にアピールすべく、成果発表はす
べて学生が行いました。



開会に先立ち、天野正子学長と落合寛司西武信用
金庫理事長よりご挨拶をいただきました。天野学長から
は本学では地域連携活動を重要な使命と位置付けて
いることが述べられ、一方、落合理事長からは、生活
学分野における企業等との連携への期待が述べられ
ました。



続いて小口悦子地域連携・研究(町
田)センター長より、本学の概要と金
融機関や自治体との連携など本学
の地域連携の特徴等を紹介しました。



前半は、①ショウガを用いた商品開発研究、
②桃色酒粕を用いた商品開発授業、③津久
井地域の伝統的家庭料理「にごみ」再現プロ
ジェクトの3題を口頭発表しました。連携パート
ナーである葉山町商工会と津久井地域商工
会連絡協議会より、メッセージをいただきました。



「東京家政学院大学 地域交流会2012」開催概要

- ◆日時 平成24年11月29日(木)15時～18時
- ◆場所 町田キャンパス 1206教室、ローズコート
- ◆プログラム
 - (1)開会挨拶
東京家政学院大学 学長 天野 正子
西武信用金庫 理事長 落合寛司 様
 - (2)地域連携・研究センター紹介
東京家政学院大学 現代生活学部 教授/
地域連携・研究(町田)センター長 小口 悦子
 - (3)連携事例発表 I
 - ①ショウガを用いた商品開発研究
 - ②桃色酒粕を用いた商品開発授業
 - ③津久井地域の伝統的家庭料理「にごみ」再現プロジェクト
 - (4)交流会 & 連携事例パネル展示
 - (5)連携事例発表 II
 - ①学校用体操着に関する調査研究
 - ②デイサービスの新規プログラム提案プロジェクト
 - ③子育てお母さんサポートマガジンとの連携プロジェクト
- ◆実施形態
主催：東京家政学院大学／共催：西武信用金庫
後援：関東経済産業局、相模原市、
一般社団法人首都圏産業活性化協会
- ◆参加人数
企業、自治体等 81人、教職員 25人、
合計 106人(学生を除く)

Tokyo Kasei Gakuin University

2012年
11/29(木) 15時～18時
(開場 14時30分)

会場
**東京家政学院大学
町田キャンパス**
(東京都町田市稲原町2600番地)

＜アクセス＞
JR東横線町田駅より徒歩10分
JR山手線町田駅より徒歩10分
JR山手線町田駅より徒歩10分
JR山手線町田駅より徒歩10分

プログラム

- ◆開会 15:00～15:10
- ◆東京家政学院大学の地域連携活動について 15:10～15:20
- ◆連携事例発表 I 15:20～16:05
 - (1)ショウガを用いた商品開発研究
 - (2)桃色酒粕を用いた商品開発授業
 - (3)津久井地域の伝統的家庭料理「にごみ」プロジェクト
- ◆交流会 & 連携事例パネル展示 16:05～16:50
(展示発表)
- ◆連携事例発表 II 16:50～17:50
 - (1)学校用体操着に関する調査研究
 - (2)デイサービスの新規プログラム提案プロジェクト
 - (3)子育てお母さんサポートマガジンとの連携プロジェクト

主催 東京家政学院大学 地域連携・研究(町田)センター
共催 西武信用金庫
後援 関東経済産業局、相模原市、
一般社団法人首都圏産業活性化協会(TAMA協会)

東京家政学院大学

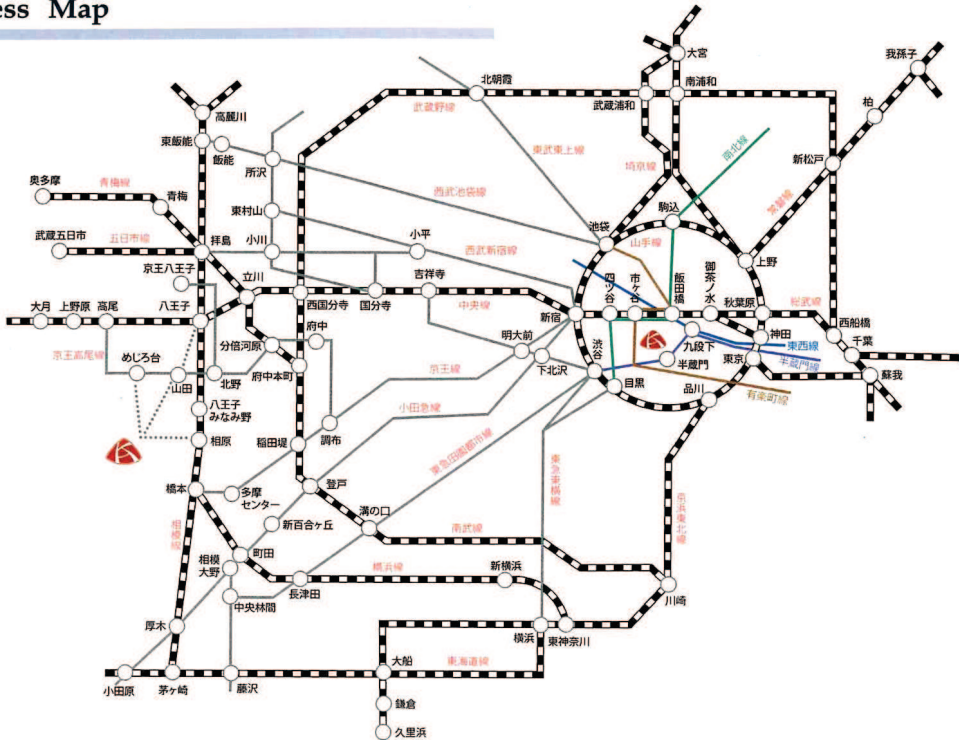
地域交流会

2012

地域連携活動の記録 (二〇一二年・四～二〇一三年・三)

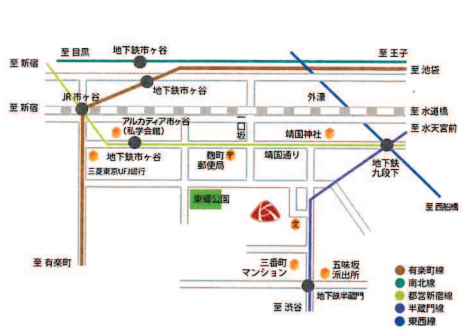
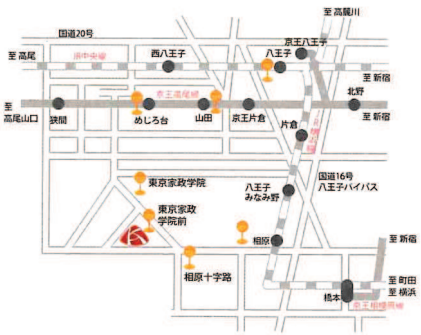
四月	七、八日	「第三九回相模原市民桜まつり」に参加し、本学と相模原市との地域連携活動を展示
五月	十三日	八王子地域合同学園祭「第八回★学生天国★」にてファッションショーを実施
	十七、十八日	「第六回東京発！物産・逸品見本市」に参加し、地域連携活動の紹介と企業相談を実施
	三〇日	第五回「大学は美味しい！」フェア(新宿高島屋)に参加し、地域連携に基づく開発商品を販売(六月五日まで)
七月	十日	企業との連携による食品開発授業「食企画・開発実習A」の成果報告会を実施
	二六日	J A 相模原市との連携によるレシピ開発授業「調理と素材」の成果報告会を実施
八月	三日	企業との連携による体操着開発授業「衣生活計画論」の成果報告会を実施
	二五日	アリオ橋本との連携イベント「夏休み 大学生と楽しむものづくり・体験教室」を実施
九月	十五日	「葉山ふれあいマーケット」に参加し、葉山町商工会との連携研究成果発表等
十月	二九日	相模原市立藤野中央公民館にて親子を対象とした「にこみ」料理教室」を実施
	八日	五十嵐酒造主催「第五回酒蔵コンサート」に「食企画・開発実習A」における開発商品を提供
十月	十三日	相模原市立千木良公民館にて「にこみ」料理教室」を実施
	二八日	三井アウトレットパーク多摩南大沢にてファッションショーを実施
十一月	二八日	「ビッグ・ハママーケット」に参加し、葉山町商工会との連携研究成果発表等
	二四日	「ビジネスフェアfrom TAMA」に参加し、地域連携活動の紹介と企業相談を実施
	二四、二五日	「さがみはらフェスタ2012」に参加し、「にこみ」プロジェクトの活動紹介、試食提供等
十二月	二七日	J A 相模原市との連携により開発したレシピに基づく「さがみグリーン」を使った料理教室を実施
	二九日	「東京家政学院大学地域交流会2012」開催
	八日	アリオ橋本との連携イベントとしてファッションショー「KVAコレクション2012」を実施
二〇一三年	一月 二三日	「第四回大学コンソーシアム八王子学生発表会」にてファッションショーの衣装を展示発表
	二月 七日	企業との連携によるお弁当開発をテーマとした授業「食企画・開発実習B」の成果報告会を実施
	一五日	企業との連携によるプリンの容器開発をテーマとした授業「生活デザイン演習」の成果報告会を実施
		相模原市立城山公民館にて「にこみ」料理教室」を実施





町田キャンパス ■生活デザイン学科 ■児童学科 ■人間福祉学科

千代田三番町キャンパス ■現代家政学科 ■健康栄養学科



〒194-0292 東京都町田市相原町2600番地

- JR横浜線「相原駅」下車、バス停「相原」から「東京家政学院」行乗車、約9分
- 京王高尾線「めじろ台駅」下車、バス「めじろ台駅のりば4番」から「東京家政学院」行乗車、約13分
- JR中央線「八王子駅」下車、バス「八王子駅南口（のりば7番）」から「東京家政学院」行乗車、約28分

※バス停「相原」から「大戸」行または「法政大学」行で「相原十字路」下車、徒歩10分

〒102-8341 東京都千代田区三番町22番地

- JR中央線・総武線、東京メトロ有楽町線、東京メトロ南北線、都営地下鉄新宿線「市ヶ谷駅」から徒歩約8分（地下鉄A3番出口）
- 東京メトロ半蔵門線「半蔵門駅」から徒歩約8分（5番出口）
- 東京メトロ東西線、都営地下鉄新宿線「九段下駅」から徒歩約12分（2番出口）

東京家政学院大学地域連携ポリシー

東京家政学院大学は、建学の精神である「KVA精神」（知識の啓発・徳性の涵養・技術の錬磨）に基づき、生活者の視点から、家政学を中心的な学問分野として教育・研究を行い、個人・家庭・地域の豊かな暮らしはもとより、地球規模の問題解決に貢献できる人材を育成し、社会に送り出すことを目指している。

本学が中心的に取り扱う家政学の分野は、地域社会（Community）との関わりが強い学問分野であり、それゆえ、本学における教育・研究活動にあたっては、地域社会との連携が不可欠である。また、その成果は、人々の暮らしや文化の発展・向上に寄与するものである。

本学では、こうした学問分野の特長を踏まえ、地域社会への貢献を教育・研究に続く第三の使命と位置づけ、その実現のために、ここに地域連携ポリシーを定める。

- 1 大学は地域社会の一員であること、また本学の発展・成長は地域社会とともにあることを共通の理解として自覚し、地域連携活動を推進する。
- 2 地域社会との連携を推進することにより、研究活動の充実と成果の蓄積を図るとともに、実践的な教育機会の創出に務め、社会に貢献する有為な人材育成を目指す。
- 3 教育・研究活動の成果を積極的に地域社会に還元し、人々の暮らしや文化の発展・向上に貢献する。

（平成23年4月1日制定）

「地域で学び、地域で育つ。」
～東京家政学院大学地域連携成果事例集2013～

発行 東京家政学院大学地域連携・研究（町田）センター
〒194-0292 東京都町田市相原町2600番地
TEL 042-782-9811（代表） 042-782-9838（直通）
発行日 平成25年3月31日



